

教育心理学カリキュラムの体系化に向けて(6)

—臨床・人格の領域における整理と統合—

川原 誠司

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第6号 別刷

2019年8月9日

教育心理学カリキュラムの体系化に向けて (6)[†]

—臨床・人格の領域における整理と統合—

川原 誠司*

宇都宮大学教育学部*

今回の一連の報告は、宇都宮大学教育学部での教育心理学カリキュラムについてこれまでのことを振り返り、今後の教育に活かすために、個々のカリキュラムを俯瞰して整理・統合するものである。本報告では、臨床や人格の領域での授業内容を整理し、教職科目での「教育相談」をベースにしながら、専門科目「臨床心理学」「人格心理学」等を中心にどのように発展的に教育できるのかを整理する。

キーワード：教育相談，臨床心理学，人格心理学，カリキュラムの整理と統合

1. 学校教育の諸問題と臨床・人格心理学領域

臨床心理学が関係している学校教育における問題は数多くある。教育記事として取り上げられやすい「不登校」や「いじめ」のような教育問題は人口に膾炙されているところである。

また、非社会的行動や反社会行動をはじめとした子どもの心のバランスの歪みとしての子どもの心理的状态についても、児童期から青年期にみられる心理的な諸症状についても大いに関連している。

強い症状までいなくても、子どもの人となりとしてのパーソナリティ（人格）を知るということにおいても重要な知見があり、ストレス等に対する特定の反応パターンを示すこととの理解にもつながる。これらのことで、子どもの個性把握や具体的対応についても適切さが増す。

より器質的な要因を考慮したものとして、近年は発達障害の知識も必要とされている。

それらの状態や症状を示した子どもにどのような心理的な対応が必要になるかという点において、心

理療法的な関わりの観点から知っておくことが一助となろう。「カウンセリングマインド」という和製英語に代表される、カウンセリング的な知識をはじめ、様々な心理療法の基礎的考えが有効である。

つまり、臨床心理学や人格心理学が学校現場に照射するものとしては、子どもの人としての心理状態の理解、ストレスマネジメントのありかたの理解、ストレス等への対処の困難さによって生じる諸症状の理解、器質的な要因への理解、それらの様相を示す子どもへの具体的対応としての心理療法的手法の理解といったような面である。

2. 教職科目と臨床・人格心理学領域

臨床心理学や人格心理学の視点は、教職科目では「教育心理学」の臨床的部分を導入として、「教育相談」の内容に多大に反映されている。また、「生徒指導」にも反映されている部分がある。

「教育相談」について、教職課程コアカリキュラム（文部科学省、2017）として示されている3つの柱は、「(1) 教育相談の意義と理論」「(2) 教育相談の方法」「(3) 教育相談の展開」である。それぞれの柱について示されている到達目標の文言を抜粋して示しながら、どのような知識が必要なのかを検討する。

(1) 教育相談の意義と理論

この柱の到達目標の2)に「教育相談に関わる心理学の基礎的な理論・概念を理解している」という

[†] Seishi KAWAHARA*: The systematization in teaching of educational psychology (6): The rearrangements and unifications for the curriculum in methods of clinical psychology and personality psychology

Keywords: educational counseling, clinical psychology, personality psychology, rearrangement and unification of curriculum

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

文言がある。この基礎的な理論・概念というものをどこまで包摂すればよいかは判断が難しいが、臨床心理学で一般的に考慮する心の構造やストレス対処メカニズム、そしてDSM-V (American Psychiatric Association, 2013) で診断される精神障害に代表される心理的諸症状が大きく関連すると思われる。

また、あまり障害的な面のみ注目しすぎるのも学校教育の中では極端になるおそれがあるので、一般的な性格のありようや人格発達も考慮する必要がある。人格心理学の内容を踏まえ、学校教員としての主対象である児童期や青年期の子どもについての人格発達、発達臨床的な知見が必要だと思われる。

(2) 教育相談の方法

この柱の到達目標の1)に「不適応や問題行動の意味並びに……発するシグナルに気づき把握する方法を理解している」という文言があり、これはストレス対処の不調や心理的諸症状の現れ方を学ぶことと関連している。

診断名を付される個々の症状もさることながら、「問題行動」という呼称で取り扱われる子どもの心の動きの外顕化 (externalizing) や内潜化 (internalizing) について十分に考えることが重要である。これらの外向きの方向ならびに内向きの方向を考慮することができれば、反社会的行動や非社会的行動の心理的機序も理解できる。

また、到達目標の2)と3)には、「カウンセリングマインドの必要性を理解している」「カウンセリングの基礎的な姿勢や技法を理解している」と記述されているので、クライエント中心療法 (Rogers, 1957) に代表されるような相談時の話の聴き方を丁寧に説明することが必要だろう。クライエント中心療法だけでなく、近年は認知行動療法のような方法も盛んであるし、また伝統的な精神分析の視点も重要である。これら各療法の基本的観点も提供する必要があるだろう。

(3) 教育相談の展開

この柱の到達目標の1)～3)に「職種や校務分掌に応じて、……教育相談を行う際の目標の立て方や進め方を例示する」「発達段階や発達課題に応じた教育相談の進め方を理解している」「組織的な取り組みの必要性を理解している」というものがあり、これらを具体的に説明するには、実際の学校での事

例もしくはそれに類する仮想事例を呈示するなどして、校内連携や子ども理解や支援への継続的な検討の意義を具体的に教える必要があるだろう。

また、4)には「医療・福祉・心理等の専門機関との連携の意義や必要性」という文言がある。最近の社会的な記事として取り扱われる「児童虐待」などで、この連携の難しさが示唆されており、必要な観点として説明する必要があるだろう。

3. 宇都宮大学での臨床・人格心理学領域に関連した専門科目

現在、本学では「臨床心理学」「人格心理学」「臨床心理学特講」の科目で講義形式のものを開講し、また、「メンタルヘルス実習」「カウンセリング実習」で実習的なものを開講している。また、専門科目ではなく基盤教育科目 (一般教養科目) であるが、「学校臨床心理学」を開講している。

これらの授業開講により、心理学授業の目安となる「公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について」の以下の部分をカバーしている。なお、川原 (2019) で述べたように、本学では公認心理師を取得することを目指すわけでないので、完全に専門的内容を網羅しきれているということではない。

- 3. 臨床心理学概論…この内容は「臨床心理学」での講義で学習する。
- 9. 感情・人格心理学の中の③人格の概念及び形成過程、④人格の類型、特性等…この内容は「人格心理学」での講義で学習する。
- 10. 神経・生理心理学の中の①脳神経系の構造及び機能…この内容は「臨床心理学」での講義で学習する。
- 14. 心理的アセスメント…この中のパーソナリティ検査の概論・概説を「人格心理学」での講義で学習する。
- 15. 心理学的支援法…この内容は「臨床心理学特講」での講義ならびに「メンタルヘルス実習」「カウンセリング実習」での実習の中で学習する。
- 16. 健康・医療心理学の中の①ストレスと心身の疾病との関係…この内容は「臨床心理学」での講義ならびに「メンタルヘル

ス実習」での実習の中で学習する。

- 18. 教育・学校心理学…この内容は「学校臨床心理学」での講義の中で学習する。
- 22. 精神疾患とその治療…この内容は「臨床心理学」での講義の中で学習する。
- 24. 心理演習…この中の一定のものを「カウンセリング実習」での実習の中で学習する。

以上の包摂状況について、一つひとつの内容については、専門家養成の課程に比べれば、詳細さや密度は十分ではないかもしれないが、将来学校教員になったとき、心理専門的な立場の方々と一定の知識と用語でやりとりできる程度になることを期待したい。

4. 教職科目と専門科目の有機的つながりについて

(1) ある程度の量の知識を定着していくこと

まず何よりも、専門科目を学んで知識量を増やすことが重要である。前述したように、心理学の専門家を目指すわけではないが、他の教員養成の各教科において、学生たちが教科専門の知識を身につけていくことと同等に一定の知識を有することが、専門性を担保する。教員免許での教職科目を超えるような知識を身につけることが専門分野の意義であろう。

このような意識を持つことで、教職科目レベルの知識定着も確実になるだろう。教育心理学の専門ではない大学院生においては（これは個人差もあるだろうが）、教育心理学の知識が学部卒業段階ではあまり定着していない様子も以前の研究からは垣間見られている（川原・石川・澤田・白石，2016）。

客観的にそのような知識量を測定できるような機会を用意するなど、視覚化することで学生側も到達度を自己把握できるだろう。

(2) 具体的な課題で考えていくこと

用語の暗記だけでは、現実的な教育場面での対応力には繋がりにくい。用語を現実の具体的な場面へどのように適用するかということも重要である。

現状では教職科目の「教育相談」でカウンセリングのロールプレイを行ったり、専門科目の「臨床心理学特講」において心理療法の用語が現実の学校現場でどのように適用できるかについての宿題を出して検討したり、基盤教育の「学校臨床心理学」で学校臨床のテーマに沿ったロールプレイ形式の模擬職員会議を行い、あえて意見の相違が出る役割を相互

に演じ、連携の難しさを感じたりするようにもしている。

今後、そのような適用面をさらに進めることが、学生にとっても有用性の実感につながるであろう。

(3) ストレスや相談に対応する自分自身のあり方を見つめること

教職という専門職の面から言えば、内省力の向上は必須である。臨床領域でいえば、ストレスへの対応、あるいは子どもの相談への対応という、生身の対応場面での自らのありかたを見つめる機会を用意するようなことである。

現状では「メンタルヘルス実習」と「カウンセリング実習」とを開講して、対応可能にしている。また、基盤教育の「学校臨床心理学」でもロールプレイ後に内省の課題を出している。

教職科目や講義系の科目は知識付与が多くなる傾向があるが、可能な限り、このような内省の機会も設定したい。

5. 臨床・人格心理学領域の用語集

前記の授業等で触れる内容について、必須用語としてまとめる。教職科目については、授業内容に加え、教員採用試験問題の出題傾向情報（協同教育研究会（編），2017）も合わせて示す。また、専門的レベルとしては、心理学検定の「臨床」「障害」「性格」の領域で問われる用語（日本心理学諸学会連合心理学検定局（編），2016）を基本として精選する。

表1 臨床・人格領域で理解する用語

(1) ストレス処理過程	
a. ストレッサー	stressor
b. ストレス反応	stress reaction
c. 対処行動	coping
d. 葛藤、欲求不満	conflict, frustration
e. 防衛機制	defense mechanism
f. 内潜化（非社会的行動）	internalizing
g. 外顕化（反社会的行動）	externalizing
h. 不登校、ひきこもり	school non-attendance, withdrawal
i. いじめ、攻撃性	bullying, aggression
j. 児童虐待	child abuse
(2) 脳と身体の生理的機能	
a. 脳神経	cranial nerves
b. 自律神経系	autonomic nervous system

c. 心身相関	psychosomatics
(3) 精神障害	
a. 統合失調症	schizophrenia
b. 双極性障害	bipolar disorder
c. 抑うつ障害	depressive disorder
d. 不安症	anxiety disorder
e. 強迫症	obsessive-compulsive disorder
f. 心的外傷後ストレス障害	posttraumatic stress disorder
g. 解離症	dissociative disorder
h. 身体症状症	somatic symptom disorder
i. 食行動異常	feeding and eating disorder
j. 睡眠-覚醒障害	sleep-wake disorder
(4) カウンセリングと心理療法, 連携	
a. クライアント中心療法	client centered therapy
b. ロジャース	Rogers, C.R.
c. 無条件の肯定的配慮	unconditional positive regard
d. 共感的理解	empathic understanding
e. 純粋性	genuineness
f. 精神分析	psychoanalysis
g. フロイト	Freud, S.
h. イド, エゴ, スーパーエゴ	id, ego, super-ego
i. 行動療法	behavioral therapy
j. 認知療法, 論理情動療法	cognitive therapy, rational emotive therapy
k. 家族療法	family therapy
l. 心理教育	psychoeducation
m. スクールカウンセラー	school counselor
n. 児童相談所	child consultation center
o. 精神科, 心療内科	psychiatry, psychosomatic medicine
(5) 人格の捉え方, 性格検査	
a. 類型論	typology
b. クレッチマー [他の人名も]	Kretschmer, E.
c. 特性論	trait theory
d. キャッテル [他の人名も]	Cattell, R.
e. 質問紙法	questionnaire method
f. MMPI [他の検査も]	Minnesota Multiphasic Personality Inventory
g. 投影法	projective technique
h. TAT [他の検査も]	Thematic Apperception Test
i. 作業検査法	performance testing
j. 内田-クレペリン検査	Uchida-Kraepelin test
(6) 精神分析の人格発達	
a. エリクソン	Erikson, E.H.
b. 心理社会的発達段階	psycho-social development
c. 基本的信頼 対 不信	basic trust vs mistrust
d. 自律性 対 恥・疑惑	autonomy vs shame/doubt
e. 自主性 対 罪悪感	initiative vs guilt

f. 勤勉性 対 劣等感	industry vs inferiority
g. 同一性 対 同一性混乱	identity vs identity confusion
(7) 人格の偏り	
a. 自己愛性パーソナリティ障害	narcissistic personality disorder
b. 演技性パーソナリティ障害	histrionic personality disorder
c. 反社会性パーソナリティ障害	antisocial personality disorder
d. 境界性パーソナリティ障害	borderline personality disorder
e. 回避性パーソナリティ障害	avoidant personality disorder
f. 依存性パーソナリティ障害	dependent personality disorder

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association. (日本精神神経学会 (監) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 川原 誠司 (2019). 教育心理学カリキュラムの体系化に向けて (2) —今後のカリキュラムづくりの視点— 宇都宮大学教育学部実践紀要, 6.
- 川原 誠司・石川 隆行・澤田 匡人・白石 智子 (2016). 大学院共通必修科目「学校教育の心理学」の新設 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 2, 175 - 178.
- 協同教育研究会 (編) (2017). 全国版 教職教養の精選実施問題
- 文部科学省 (2017). 教職課程コアカリキュラム < http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm >
- 日本心理学諸学会連合心理学検定局 (編) (2016). 心理学検定一問一答問題集 [A 領域編] 実務教育出版
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology, 21*, 95-103.

平成31年3月29日 受理

**The systematization in teaching of educational psychology (6)
: The rearrangements and unifications for the curriculum
in methods of clinical psychology and personality
psychology**

Seishi KAWAHARA